

# 特高（特別高等警察）に調べられる

沢田 薫

昭和十七年、十七歳、私は嘉瀬農会（昭和十九年産業組合と合併し、農業会となる。敗戦後農業協同組合）の書記を務めていた。当時農会の場所は嘉瀬村役場と渡り廊下で繋がっており役場とは自由に行き来ができた。役場は嘉瀬溜池の北側にあり現在は昭和町鳴海博友宅地となっている。

その頃役場には木立民五郎さんが戸籍係兼兵事係として務めていた。私はともかく本を読む事が好きで手当り次第読んでいるのを見て、文学書を読む事を強く進められ、自分の蔵書を貸してくれた。明治大正時代作家の作品からプロレタリア文学の作家作品等々である。

当時私は見様見まねでも俳句を作っており、俳句は小山内昭人氏に見てもらったりして、東奥日報発行の月刊誌「月刊東奥」の文芸欄に俳句、短歌、川柳、方言詩等の投稿マニアになっていた。それぞれの各部門に入選したりで、月一回発行の「月刊東奥」を原辰商店（新聞の配売所もしていた）へ販売日が近づくと幾度も足を運び、一日千秋の思いで待っていた。

そんな或る日、初夏の頃だと思ふ。木立さんから村の文学好きな若者を誘って文芸誌を作ろうと相談され、小山内昭人、小

倉秀高、今清作、神島孫蔵、山中利幸等々を集め、衆議一決、発行する事となり、文芸誌の名前は「蒼空」と決まり、編集及びガリバン刷りは私が引き受けることになった。月一回発行で、二号まで出して終ってしまふ。その頃はもう言論統制云々の法律など出来ていて、出版物は大小に拘わらず検閲のため或る機関に送る事が義務づけられていた。

その「蒼空」の中に書いた文章の中味が言論統制違反になったのか（そうでないかもしれない）木立さんが青森警察署に出頭を命じられ、そのまま拘留された。木立さんは勿論共産主義者ではない、むしろ国粋主義者で幕末の志士吉田松陰の松下村塾の弟子達の活躍ぶりを話してくれた。津軽の寒村でもインテリ人と見れば特別高等警察を作った国家の最高機関は「治安維持法」と云う法律を作り、戦争反対者でなくても共産主義のレッテルを貼られ逮捕された時代だった。

木立さんを待っていたが一ヶ月を過ぎても帰って来なかった。或る日、私に金木警察署（今のみちのく銀行の場所）から呼び出しが来た。何んの呼び出しか、私にはさっぱり分らないが、金木警察署に出頭した。二階へ上るよう指示された二階には洋

で食うと云う事は。米を増産する国策の方針に逆らっているとも解釈出来る。そうゆう意味ではないのか、例えば間接的に今の戦争に反対であるとか……。

全く私の考え及ばない方へ誘導尋問である。飛躍した尋問である。

その後のやり取りについてはもう五十四年前にもなるので忘れてしまったが、もう帰ってよろしいと云われ、そのまま再呼び出しはなかった。

個人の自由など全然なかった時代へ巻き込まれて行った一こまである。

## 秋 晴

沢田 かおる

服を着た三十年代中頃の紳士が机一つある椅子に座っていた。眼鏡をかけた好男子である。開口一番に「私は青森警察署から着た白取と云うものである。そこで貴君に聞きたい事がある」と薄っぺらな小誌を出した。警察官で私服（洋服）である。私はこの人が特高警察と云う人かと思った。小誌と思ったものが私達が出した「蒼空」であった。

白取と、自己紹介した彼は薄っぺらな「蒼空」をべらべらめくり読み出した。

学校がら戻た  
児童……

稲の穂コかじりながら  
田圃の畔コ  
並んでくる。

と読み上げ、この方言詩を貴君はどうゆう意味で書いたか意見を聞きたいと迫ってきた。こんな幼稚な方言詩にどんな意味も意見もあつたものではなかった。私は子供達が学校の帰り田圃の畔の近径を歩いてくる秋の風物をそのまま書きましたと答えた。

彼はそうではないだろう。汗して作った百姓の稲の実を途中

## 津軽弁 村の笑い話

NSH

### アツパの乳

アヤとアツパが、ニラで喧嘩していた。  
そごさ、おもでから五ツになるミツエが走って来た。  
ミツエは、アツパを庇う用に、アヤの前に両手を広げ、  
怒りに燃える眼で、じつとアヤをにらみ  
「アツパ、今夜からアヤさ、チチ飲ませるな。」

(村)



52年前の筆者

# 追憶・太宰治断片記

山中 正津

十年一昔は、あつという間のことだが、五十年前の事と言え  
ばやはり遠い遠い昔の物語で、当時の記憶もだんだんと薄らい  
でゆく。

そこで私は思い出した。こんなこともあったんだという記憶  
を探すことが出来た。それは、戦後の暗い世相の中で、自称文  
学青年が集って、心に「灯」をともしようということと同誌  
「灯」を発行したのである。その同人誌の周年記念号の表紙  
には、太宰先生から「花を見る 花を思ふ 花を見ず 花を  
思はず」の一文をいただいた。

この昭和二十一年十一月二十日発行の灯第十一号に掲載され  
た小品を次に紹介してみる。

## 『歩きながら』

汀 美空

歩きながらも考へる癖が私にはある。  
どれと云ふ目的もなく、唯なんとなく何かを考へてその考へ  
ながら歩くと云ふのに満足してゐるのだから随分オカシな話  
である。そんな時の私は余つ程間の抜けた顔をしてゐるんぢや

ら我々は齟齬して金を貯めるよりも、大きな闇取引で  
もやつて、どつと大儲けし、儲けた金はどう使つたら  
一番綺麗に浪費出来るかも考へてゐた方が最も気の  
きいた生き方な訳さ。

—— ふん！

分つたような分らない様な、感心した様でもあり、摸迦ら  
しいとでも云つた様な変な顔をしながら友は黙々と歩いて  
ゐた。

私自身も浪費と云ふことについて随分変な定義を下したも  
んだと、少しは呆れながら、それでもとても真面目な顔を  
して

—— 兎に角、人生は浪費だと云へる事は一種の悟りだな  
あ。人間と云ふものは、欲で凝り固まつた動物みたい  
なものだからね。美しい物を見れば、ああ美しいなあ  
と思ふし、美味しさうな物を見れば、食べてみたいと  
思ふ。好い女を見れば、あれを自分のものになりたいと  
思ふのが人間の本能なんだからね。

友の聴いて居ないのも無頓着に、私は自分自身に言へ聴か  
す様にして歩いてゐた。

いつか、夜遅くこの路を〇先生（作家）を送って行つた  
とき、先生は

—— 外から見た可奈木は相当なもんだね。ほら、あの沢  
山灯のついているところは何んだらう？

ないかしら。いやそんな筈はない。より一層澄ました顔をし  
て歩いてゐるに違ひあるまい。

—— 人生とは？

—— 人生は浪費だ。

〇先生が云つたこの言葉が、なぜか妙に私の頭にこびりつ  
いてしまった。

—— 人生は浪費だ。

私は歩きながら、ふとそんなことを呟いた。

—— えっ？ 人生は牢死だって？

—— いや、違ふ。人生は浪費だと云つたんだ。

—— ？……。

—— あのね、人生は浪費だと云ふのはね、私達は生きん  
が為には常に食ふことを考へねばならぬ。第一に考へ  
ると云ふ力を浪費してゐるんだ。次には食物を浪費し、  
時間を浪費してゐるんだ。食物その他の物質がなくな  
ればこれを生産しなければならぬし、生産に全力をつ  
くせばエネルギーを消耗する。そのエネルギーを補ふ  
ためには亦栄養をとらねばならぬ。常に浪費さ。だか

—— あれですか。あれは病院です。

—— ハハア、成程病院か、ぢやアあんな綺麗な灯にまじつ  
て、病原菌がウヨウヨしてゐるんだね。ハハハハ……。  
美しいと思つて油断は出来んよ。

—— 先生はさう云へながら、急ぐでもなく、ふところか  
ら白いハンカチを取り出し、鼻をこすりこすり歩いて  
ゐた。

—— 冷い風が、スーと頬をなぞてゆく。空を見たら真黒  
な雲が後の方からグングン私たちの頭上に迫つて来る。

—— あの病院のある処はね、元学校だったんだよ。僕は  
よく学校の窓から岩木山を眺めてゐたものだった。そ  
して写生と云へば、加世の林と岩木山とがみんなの画  
用紙に描かれたもんだったよ。

—— 先生は幼き頃の追憶にふけてゐる。

—— 銀砂をまき散らした様な大空も何時しか雨雲の為黒一色に  
塗りつぶされてしまった。Kさんは、一寸空を見上げて

—— あ、降つて来そうだな……。

—— と云つた。

—— ああ、降るな、丁度一雨ほしいときぢや。

—— 先生は空を見上げもせず簡単に云つて、裾をまくつたが、  
それでも別に急ぐでもなく歩きながら

—— お世辞ぢやないが加世は本当によい処だよ。浪費の  
村だね。こんな村が好きだなあ。可奈木はこの辺ぢや

小都会を以って任んじてゐるよ。小都会か、ハハハ：  
おかしくって笑わせるよ全く。外観は一寸美しく見えるが、内面はみんな醒醒してゐるよ、商人根性なんだなあ。外面如菩薩、内面如夜叉とは可奈木の町の様なのを云ふのだよ。金を貯める事より知らないでね、それで、見かけよりほんとうの金持が少ないんだ。

—— 先生は漢迦に自分の町をクサすぢやありませんか。県会議員も出たし、今ぢや代議士まで出てるもの、矢張この辺ぢや一番ですよ。最も加世なんかは明日食ふ米がなくても三味線などを鳴らしてゐるのだからね。もう風流なのか自暴自棄なのか一寸分らない位ですが……。

—— いや、そこが好いとこなんだ。美島なんかもさうだよ。あんまり大きい街ぢやないが、まあ御所河原位のそれで美しい街だね。それが街全体がとても派手な、親分肌の街なんだ。一ぱいの酒を飲まんが為、自分の着て来た着物まで売っちまふのですからね。それからこんな唄があるだろう。

へ三島女郎衆はイーエ……。とか何んとか云ふのであるでせう。この唄の歌詞を書いた大きな石碑をたててその除幕式だと称して、芸者の手踊りかなんかで大騒ぎしてゐるんだ。

とに角お祭の好きな街で……こんな街が本当に浪費の

つつ歩いてゐるのだった。

Kさんは加世の歴史を語って居た。幾分誇張しながらも加世の良さを話して居た。先生はそれに一つ一つ「フンフン」と云って、さも感心した様にきいてゐたが、

—— うん、Kさんのお話を聴いて益々加世の良さがわかって来たよ。加世は文化の発祥地なんだよ。津軽の文化は先づ加世からと云ふ訳だなあ。民謡にしろ、奴踊りにしろ、加世は文化的な土地だったんだ。加世は好いね、僕は断然加世のファンになる。

一寸猫背のやうな格構で歩く先生は、ひょいと左の袂に右手を入れ、

—— ああ、今日は面白かった。夜風に吹かれながら海鳴りの音、懐には蝮、何かでさうだなあ。

蝮と聴いたので、私は内心揶揄った気がしてならなかった。先生もKさんも、あの蛇が本物の蝮だと思つてゐるのだ。私はどうかして先生やKさんを一度瞞して見たいと思つてゐたのが、今それが出来たのだ。私は心の中で「ザマァ見ろ、日本一の小説家も知らぬが佛で、俺の為にまんまと青大将を食わせられたぢやないか」さう思ふと私は満足感で一ぱいになって、歩く足も踊る様な気さへした。

日頃何かと大きな事を云ふKさんさへ瞞し終いたのだ。と思ひ乍らその半面、「この蝮は色が黒いなあ、それに

街なんだね。加世はよく似てゐるよ。

先生は喋りながら、しきりに鼻の頭をハンカチもてこすつてゐる。肌寒い風が稲の穂をゆり動かし、私達の四囲は黒い秋の幕に十重廿重と包まれてしまった様な感じがする。はるか西の方から海鳴りの音が聴えて来る。

—— ああ、海は荒れてゐるなあ

—— 私は何気なく呟いた。

—— え、海が？ ホホウ波の音が聴いるか。

—— ハア、風の強い夜なんか、よく西海岸（七里長浜）の海鳴りが聴こえるんです。

—— フーン、海がそんなに近いのかなあ、可奈木の人達は誰も海鳴りをきいたと云つてる人がないよ。知らないのかなあ。

—— いや、海鳴りはよくきこえるんです。此処から直線で行けば西郡の海辺まで三里ほどですから、田圃に出ればよくきこえて来ます。

Kさんは、さらに説明した。Kさんも先生も可成り廻つてゐた。

黒雲のおひかぶさつてゐるのに、せかず急がず歩いてゐるのは、ほてつた頬を初秋の夜風になぶらせる為でもあつた。

さう云ふ私も三・四杯の濁酒にごりざけに顔を真赤にさせ冷たい風を肌に快良く感じながら、先生やKさんの言葉に耳を傾け

こんな大きな蝮なんて珍らしい。大きいから骨が固いのかも知れないね。」と、先刻飲みながら云つたKさんの言葉が気になって、Kさんだけは何もかも知つてゐるのぢやないかしら、と思つたりした。

Kさんにはどうせ後で分るのだからO先生だけ瞞したのでも手柄だ、などとそんな事を考へながら、蛇は本物の蝮であるかの如く真顔で、

—— 先生、蝮大丈夫ですか。

—— うん、しっかりと袂の中に入れてゐるよ。これを一寸づつ食つて小説を書くか。だけどOが蝮を食つてゐると聴いたら女の読者は減つてしまふかも知れないなあ。家へ帰つても女房に見せないで、押入の中に頭を突込んで食ふか。ハハハハ……。

—— まあ、せいぜい蝮で精力をつけて貰つて先生に大作を書いて頂くよ、なあ。

Kさんは腕まくりしてその昔剣道で鍛えた逞い腕をなぜながら、顔だけ私の方に向けてさう言った。

—— 蝮がなくなつたら、又山へ行つて捕つて来ますよ、先生。

—— いや、もう沢山ですよ。ホントは此奴もちよつと恐いんだよ。だけど身体に好いと聴いたもんでね。ハハハハ……。毎日蝮ばかり食つてゐたらさぞ荒つぽしい小説が出来るだろうなあ。

途中までと云って送って来たのが、話し乍ら歩いたらもう可奈木の町まで来てしまった。町に入ればすぐ川が流れてゐる。

へ加世と可奈木の間の川コ 石コ流れて木の葉コ沈む 津軽南部地方で有名な民謡として唄はれてゐる可奈木川である。

その橋の上で別れた。

—— 今日には本当に面白かった。又時々遊びませうや。

先生はさう云って、橋を下り、自分の家の前に続く坂を猫背をかめながら上って行った。私達はその姿が闇に消えるまで橋の真中に立って見送つてゐた。

その姿が全く闇の中にとけ込んでしまふと、Kさんは、つかつかと欄干に近寄り、すつと欄干の上に乗ったかと思ふと、さつと前をまくり上げ、川に向つて、サーサーと小便を始めた。

—— あーあ、好い気持だ。俺は川に小便をするのが好きで、中学時代はよくやったものだ。全く何年振りかであり好い気持だ。

銀の線が一本空中に半円を描いて落下し、うねうねと不気味に蠢めいてゐるとんよりとした暗い川の流れて吸ひ込まれていった。

私もなんだか急に子供心に還つた様な気がして、その反対側のコンクリートの欄干の上を、サーカスの娘が綱

渡りでやるように、両手をひろげて、小走りにカタカタと下駄の音を響かせながら二度も三度も端から端へ渡り歩いた。

ポツリと頬に冷いものが当たった。

—— そら、雨だ。跣で駈け出せ。

Kさんは云へながら、欄干からひらりと飛び下りた。

—— そら、駈け出せ。

私も飛び下りた。

Kさんは下駄をぬいで跣になったが、駈け出しはしなかった。

—— 人生は浪費だなあ

二人はどちらからともなくさう云って顔を見合せ、ゆっくりゆっくり歩きはじめた。

終り』

なぜ、この幼稚な小品を冒頭に掲げたかという、五十年前のことを最もリアルに伝える記録であると思つたからである。この文中の「可奈木」は金木であり、「加世」は嘉瀬である。「津軽南部」とあるは、津軽北部で、「加世と可奈木の間の川」の「可奈木川」とあるは、民謡に唄われる小田川のことではなく、金木川なのである。

当時、太宰先生と夜こうして歩いたのは始めてで、数回嘉瀬に来てもらったが、すべて日中だけであった。

次に、断片的に思い出を掘り起こしながら、太宰先生との交流の回想を記してみたい。

## ▽埋木文庫



(写真提供 金木町教育委員会)

木立民五郎宅が、現在の吉川医院のところにあつた。門の左側に楡の木が一本あつた。直径三十センチほど、樹高十メートルぐらいの立派な木である。現在の吉川医院は改造されているが、位置は当時のままである。場所は、嘉瀬の前町通りで、この通りは旧盆になれば、盆踊りの踊り場となる。

その頃の嘉瀬の盆踊りは、津軽北部では有名であつた。金木、喜良市の近在は勿論、遠くは車力、十三（現在の市浦村）からや、稲垣、川除（現木造町）など岩木川を越えて若者達が集り、踊りの輪を広げてくれた。

その通りの幅員は六、七メートルほどの道幅いっぱい、約二百メートルに及ぶ踊りの輪が、午後八時ごろから、夜明けまで続くのである。

踊りの期間も、十三日は墓参りのため、十四日から二十日盆までの一週間踊り尽すのである。

最初、「どだればち」踊りからはじまり、甚句踊り、逸子踊

り、奴踊りと変つてゆく。奴踊りはむづかしく、中高年の男女が、主に中年のオガ様たちが赤襦袢じゅばんを着て、腰をぐつと下ろして、「サン、ヨヤナカサッサ……」の気合をかけ、唄い手が、へサーサー、これから奴踊り踊る、サーサー、これから奴踊り、踊る。

と唄いはじめ、踊りの輪が、サッササと回つてゆく様は、さすがベテランと思わせる仕草である。

盆踊りの主催者である若者頭が、踊りの輪の中央で、「これから逸子踊りに変ります」と叫べば、唄手も「逸子」をすぐ唄うし、「これから奴踊りになります」と告げれば、踊りの輪がサーッとくずれ、ベテランたちの小さな輪になり、あとの踊り手はみな見物人となるのである。

お盆のために買ってもらった下駄や足駄がすりへってしまった、下駄屋は足駄の歯替えて繁昌する、という話もあるほどである。

普段はあまり人影もないひっそりした通りだが、お盆の期間中は、お寺へ行く道でもあり、お寺の裏には墓所もあるので、墓参りの人々で日中から賑わつた。お墓参りは、昼間でも提燈ちようちんを持って行くのが風習であつた。それぞれの家紋のついた提燈が行き来した。

太宰先生が、珍らしく、昼下がりの時間に、木立宅の二階の一間に座つていた。木立さんが、酒の支度を家の者に言い付けに階下へ降りて行っている間、私は先生に嘉瀬の盆踊りについ

て説明していた。

「嘉瀬というところは、昔からの風習が生きているね。まるで人が居るのか、居ないのかわからないような村でありながら、お盆の期間中そのように人が集って、踊り狂うとは見上げたものだ。」

先生は、さも感心したように、フム、フムとうなずきながら聞いていた。

木立さんが上ってきて、「今支度させているが、飲む前に先生に一筆腕を振るうてもらいたいです。」と言って、私に墨を溜ることを命じた。大きな硯に幅広の墨、小鉢と水差しが持つて来られ、私は一心に墨を溜りはじめた。「小鉢にいっぱいなるまで溜れ。」と言われ、私は額に汗をして墨を溜った。

そのうちに、酒の支度が出来て、「津軽の文化酒」と先生の名付けた濁酒の澄ましを飲みはじめた。あまり酔わないうちに一筆書いてもらおうかというので、木立さんは前から準備していた檮の板を先生の前に差出した。

先生は、檮の板を目の前に、腕まくりをし、「一気呵成、一気呵成に書き上げようぞ。」と気合を入れた。

私は、大きな硯の墨をそっと先生の右前に押しよせた。

木立さんは、はじめ自宅の門の脇に生えている楡の木にちなんで『楡の木文庫』と書いてもらおうつもりだったが、私は、『埋木文庫』というのが好いんじゃないか、と注文をつけた。木立さんは「うん、それもいいな。先生はどっちが好きですか。」

「精力絶倫、二寸喰べれば鼻血が出るという代物だ。喰の照焼よ。」

そして、カラカラに乾いている喰を一寸ほど折り取って喰べてみせた。先生も「まむしか。」と、こわごわ木立さんを真似て、一寸ほど折り、口に入れた。

「うん、これはいける。ウイスキーに合うかも……。」

木立さんは、「先生、これは一日に一寸が限度だから、二寸喰べればホントに鼻血が出ますよ。これを持ち帰って、少しづつ喰べて身に精をつけて大作を書いてくださいよ。」

「そうだなあ、これを一寸づつ喰べて小説を書くか。だけど、私が喰を食っていると聞いたら、女性の読者は減るかも知れないなあ。家へ持ち帰っても、女房にゃ見せないで、押入れの中に頭を突込んで食うか。ハハハ……。」

秋の日は暮れるに早く、「そろそろ帰るか。」という先生の声に、金木まで送って行くことになった。

先生は、立ち上って部屋の隅に置かれた、先程書き上げたまだ墨が乾き切っていない「埋木文庫」を見て、「これは、高い値がつくぞ。」ともう一度言った。

## ▽りんご園で宴会

桜も散り、りんごの花が咲くころ、木立さんのりんご園へ原田僚さん、山中利幸君、私と三人が集り、鶏鍋の準備をするこ

と問うたのに対し、一氣に筆を走らせたのが『埋木文庫』であった。

書き上げた先生は、「ふーっ」と大きく息をして、「この書は、何年か経てば高い値がつくぞ。」と言って、鼻の頭の汗をふいた。

私は、太い筆を受取り、古新聞紙へ何度も何度もこすりつけた。

木立さんは「うーん。先生は書には自信があるんだなあ」と言い、「埋木文庫」と書き上げられた。まだ墨のかわかない檮の板を、そっと部屋の隅の方に移し、じっとそれを見つめていた。宴会がはじまり、木立さんからいろいろ嘉瀬の村の話がなされた。山源へ婿に入った惣助の実家「能久」は嘉瀬では大百姓であった事、りんご生産の事、古町に伝わる村端れの大木に、夜な夜な化物が出たという昔の話など。

それぞれ大分酔が廻つところで、木立さんは、「先生に珍らしい物を食してもらおう。これは、そんじょそこらで手に入らぬものなんだ。」

と言い、私に、「おい、アレを出して……。」と。私は、紙に包んで大事に持って来た「喰の照焼」を先生のお膳の上に差出した。

「なんだ、これは。何かの干物か?。」

先生は、細い長い指で、そっとそれをつまんでみた。木立さんは、

き、畑の隅にある冬越しのネギを掘洗って置く程度の事で、鶏は肉が多いというので横班プリマブロックという品種のが、りんご園の人夫に来ていた吉崎清春が何処からか探して来て、二本の足を荒縄で縛りりんごの樹の枝へ逆さ吊りにして、喉から血を下げ、毛焼きも終っていた。

丁度タイミング良く、木立さんが太宰先生を案内して現れた。いつも和服の着流し姿の先生は、今日は国民服に編上靴。先生も軍隊へ行つた事があるのかなあ、と思った。その格好は大事な作業をするためのものだった。

「今日先生は鶏を解体してくれる。みんなも先生の解体ぶりを見せてもらって、酒のサカナにしよう。」と木立さんは、「先生、もう準備が出来ていますよ。早速取りかかってください。」と促した。

「よしきた。」と上衣を脱いで腕まくりをした。私たちは、本当に出来るのかな?。大家のオンチャマが鶏の解体などできる筈がない。と興味津々で見守った。それが、かねて研いでおいた出刃庖丁を巧みに使って捌いてゆく。吉崎が傍らについていて、肉、手羽、内臓と大きな皿に分けて入れてゆく。人は見かけによらぬものだ。と感心した。

料理は肉も骨もぶつ切りで、ネギも一寸ほどに、瘦せた越冬白菜は手でむしって鍋へぶちこんだ。

「いや、大したもんだ。先生が鶏の料理が出来るとは、ついさっきまで半信半疑だったんだ。おい、みんな。山源のオンチャ

マの鶏鍋を御馳走なりましたよぞ。」木立さんは、小屋の中の囲炉裏の周囲にそれぞれ席をとらせて、天井からつるされた鉤のはな（自在鉤）にかけられ鍋の中がフツフツと煮立ちはじめると、私にドンブリに盛り分けるよう命じた。

白色レグホンと違って横班プリマロックは食肉鶏なので量が多い。五人に盛りつけても鍋の中にはまだ半分もある。木立さんは、

「太宰先生の料理に乾杯っ。」と音頭をとり呑みはじめた。みんなは、「美味いっ。」と云ってほめた。お世辞でなく本当に美味しかった。先生は、どんなもんだい。とでもいう風に、鼻の頭をこすりながらニヤッと笑った。骨つきの肉はハーモニカのようにして喰べた。

先生と木立さんは、呑むほどに酔うほどに話がはずんだ。私たちは聞き役、喰い役である。

先生は、木立さんに向かって、

「ひとつ、昔の唄でも唄って聴かせましょうか。」

「それはいいね、オレはデカンショ節でも唄おう。」

木立さんが、

「デカンショ デカンショで 半年暮らす

あとの半年 寝て暮らす

ヨイヨイ ヨイヨイ デッカカンショ

だみ声を張り上げた。

「僕は、ドンドン節。」太宰先生は座り直した。

「逢うて行きたや 鶴松さんに

幼馴染みの あの人に

忘れられよか 筒井筒

「沖の黒船 狭霧で見えぬ

泣けば涙で なお見えぬ

泣くに泣かれぬ明烏

太宰先生は、しきりに鼻の頭を白いハンカチでこすり、

「さあ、東雲節を歌って、これでお開きにしよう。」

「なにお くよくよ川端柳

焦がるる なんとしよ

水の流れを見て暮らす

東雲のストライキ

さりとは つらいね てなこと

おっしゃいましたわね

自由廃業で廊は出たが

それから なんとしよ

行場がないので 屑拾い

浮かれ女のストライキ

さりとは つらいね てなこと

おっしゃいましたかね

りんご園の中の宴会は、いくら大声を出しても誰に迷惑か

「駕籠で行くのは お軽じゃないか

私 売られて行くわいな

父さん ご無事で 折々は

たより聞いたり 聞かせたり

ドン ドン

「伊勢は 津で持つ 津は伊勢でもつ

尾張名古屋は 城でもつ

家のしんしよは嬢でもつ

嬢の禪は紐でもつ

紐のしらみは その皺でもつ

坊士の鉢巻 耳で持つ

ドン ドン

興に乗った先生は、私と利幸君を指さして、「サア、君たちも歌いたまえ。」と催促した。

音痴の私は、流行歌など全く歌えない。利幸君と示し合せて、仙台通信講習所清明寮の寮歌を合唱した。僚さんは、それに負けずと五農の校歌を歌いだした。

木立さんは、「次は、唐人お吉とゆくか。」

「駕籠で行くのは お吉じゃないか

下田港の春の雨

泣けば椿の花が散る

（二番目からは先生との合唱になった。）

けるでもないし、歌い終われば自分に自分で拍手した。手拍子のみんなも拍手して座は最高に盛り上がった。

やがて、先生は、ふらふらと立ち上がった。木立さんも先生の肩を支えるように立ち上がって、私に「火の始末はキチンとしろ。」と言いつけて、二人はりんご園を去って行った。

### ▽ 美しいステッキ

中柏木一番の地主である原田家の跡取り（家督）息子に生れ原田僚さんは、五所川原農学校（現五所川原農林高校）を出て、上の学校にも進学せず、家業の農業（りんご栽培）を継いだ。

ある時、僚さんは私に向かって、「太宰先生を私の家へ連れて来られないか、珍らしい物を見せてあげたい。先生がよければ差し上げてよよい。」と言った。

その珍しい物は何か。私にも明かしてくれなかった。兎に角先生が来てくれた時に発表するということだった。

私は、木立さんを通じて、太宰先生に来ていただけるか打診した。

一週間ほどして行ってもよい。という返事が来た。木立さんは、「歓迎の方法は全部まかせるから、日時が決ったら教えてくれ。」と言われ、僚さんと私は、いろいろ打合せをした。先生の都合を聞く連絡係に山中利幸君を頼んだ。利幸君は、仙台の通信講習所を出て、金木郵便局に配属になり、郵便係をしていた。

太宰先生は、雑誌社へ原稿を送ったり、郵便物を取りに行っ